



国立看護大学校 卒業生に聞く ～ 森山 潤 さん ～

国立看護大学校を卒業し、各方面で活躍している先輩へのインタビュー第1回目は、森山潤さんです。国際協力に興味があるという森山さんに、ご自身の臨床看護師としてのご経験、大学院進学のご経験をふまえ、その中で体験されたことと、将来への熱い思いを語って頂きました。

国立看護大学校を受験するまで

看護師を目指されたきっかけは何ですか。

実は、最初は介護に関心がありました。中学生のころデイサービスセンターのボランティアをしていて、高齢の方とお話しをすることが多く、自分にも何かできないかなと思ったのがきっかけでした。そのうちに、どの方も病気を抱えていることが多く、看護の方ができることが多いかなと思い、看護の道に進むことにしました。

国際協力に関心があったのはいつ頃からですか。

それもその頃ですね。黒柳徹子さんの本を読んだりして、アフリカ難民のことにも関心が向き、国際協力にも興味を持っていました。

国立看護大学校の受験を考えたのはいつ頃ですか。

高校を卒業するときは、地元の大学の看護学部を目指していました。でも、最初の年は受験に失敗してしまいました。高校時代はテニス部でテニスに明け暮れる毎日で、本格的に勉強を始めたのは部活が終わってからだったので（笑）。

そうでしたか。それからどうされたのですか？

それから、1年間予備校に通いました。そのとき予備校の英語の先生から「とにかく外に出てみる」ということを言われて、考えが変わってきました。それまでは、地元にいることが一番という考えしかなく、地元を離れようという気持ちはなかったのですが、その先生と出会ってから一度地元を出てみようかなと思い始めました。そして、東京の看護系大学を調べているときに、国立看護大学校のことを知り、国際協力のことも学べそうだったので受験してみることにしました。

国立看護大学校に来てみてどうでしたか？

自分が大学に入学した時（3期生）は、まだ卒業生がいない状態でしたので、卒業生たちがこれからどういうキャリアに進んでいくのだろうか、とても興味深かったです。



▲入職4年目、ICUの仲間・先輩と共に。前列右端が森山さん。

また、これまで男で看護師を目指す人が周りにはいなかったのですが、同級生に男が9人もいて嬉しかったですね。みんな看護に対して熱い気持ちを持っていたので、今でもよく会って今後のこととかを話し合ったりしていますね。

国立看護大学校での学生生活は

学生生活はいかがでしたか？

勉強も大変でしたが、アルバイトも含め色々な人と出会ったりして、本当に楽しかったです。試験前には同級生と一緒にファミリーレストランで朝まで勉強をしたりしました（笑）。普通の大学に比べると勉強する内容がとても濃くて、休みが少なかった気がします。でも、グループワークや実習を通じて、同級生の結束は強くなっていましたね。

印象に残っている先生はいらっしゃいますか？

色々な先生にお世話になりましたが、竹内先生の研究室によく出入りしていました。行くたびに色々な本を紹介していただいたり、借りたりしていました。先生と話していて、物事の見方とか考え方とかを学んだ気がします。その当時は、暇さえあれば本を読んでいましたね。キューブラロスの「死ぬ瞬間」とか、村上春樹の小説など、ジャンルを問わず読んでいました。世の中のことを知りたかったというか、できるだけ学校の勉強では習わないことを求めている

たというか、そういう感じで図書館にもお世話になりました。

病院実習はいかがでしたか。

病院実習では、学校での勉強だけでは得られないような楽しさがありました。患者さんは病気と向き合って辛い状況にいらっしゃるのですが、看護学生の自分でも患者さんの役に立てることがあるということにやりがいを感じました。実習期間中は毎日の勉強がかなり大変でしたが、患者さんからの励ましに救われ、頑張ることができました。

印象に残っている患者さんはいらっしゃいますか。

痛みが続いているがんの終末期の患者さんを受け持つことができました。最初は傷の痛みとかそういうところばかり気になっていたのですが、「毎日、来てくれて話ができるのが嬉しい」と言って頂けることができました。自分がいないときは一人で痛みを耐えていらっしゃるのだろうなと思うと、話し相手がいてくれることで痛みのことを少しだけでも忘れることができるというか、目に見えないケアを行うことも看護なのだと思いました。日々患者さんと向き合う中でも、患者さんにとって本当に必要なことは何かを考えるきっかけになったと思います。

国際実習はいかがでしたか。

自分たちの時はタイに実習に行きました。実習では、個人の旅行では行けないような病院内や地方の村まで見学することができました。また現地の看護学生と一緒に生活するなかで、彼らの看護学生としてのモチベーションや能力の高さを実感しました。医療については、日本との違いに衝撃を受けました。どのようなことが違っていたのですか。

日本では電話で救急車を呼ぶとすぐ来てくれるのが当たり前ですが、そもそも連絡する手段がない場合や、救急車を呼んでも来るまでに一日近くかかる場合があることです。地方では、病気になると現地の保健所に行くのですが、そこに医師がいるとは限らず、薬も必要なものがあるとは限りません。日本だったら助かるかもしれない場合でも、ここでは助からない可能性があるということを目の当たりにしました。

国際実習で印象に残っていることはありますか。

エイズに関する文化や感じ方も、日本とは大きく違うと思いました。HIV感染者の方が過ごすコミュニティにも行ったのですが、「エイズの恐ろしさを知ってもらいたい」とご自分の遺体を展示され、

後世に伝えたいと希望される方がたくさんいらっしゃいました。そういう所にも見学に行って、今まで想像もしなかった考え方に驚きましたし、色々な意味で印象に残りました。

在学中には、国際協力に関係することで、どのようなことがありましたか。

在学中は、サークル活動で国際協力の勉強をしたり、国連やユニセフの講演会にもよく行ったりしていました。そういう経験をする中で、国際協力に関わりたいという気持ちは強くなっていました。



▲ICUで患者さんの視線に立って日々のケアに取り組む。

国立国際医療研究センターに就職して

卒業後はどうされたのですか。

自分は国際協力に関心があったので、新宿の国立国際医療研究センターに看護師として就職しました。最初はICU（集中治療室）に配属されました。人工呼吸器をつけた重症の方を毎日受け持つので、呼吸・循環に関することや検査データの読み方など、一から勉強したりして、いろいろ苦労しました。

どういうご苦労があったのですか。

最初のころは右も左も分からず、先輩に話しかけるタイミングが分からないとか（笑）、そういうところから大変でした。でも、プリセプター（新人看護師の指導者）からしっかりと指導して頂いたのがよかったです。人工呼吸器をつけて気管内に挿管をしていると声が出せないのですが、そういう患者さんとどういう風にコミュニケーションを図ったらいいのかなど、実践的なことはほとんどが先輩から教わりました。





▲スタディーツアーにてフィリピンへ。現地の子どもたちと。

就職後、国際協力に関することはいかがですか。

国立国際医療研究センターには、国際保健医療協力サークルというのがあり、夏休みを利用して海外へスタディーツアーに参加していました。これまでにタイの難民キャンプ、フィリピンの病院視察、日本では奄美大島のハンセン病施設などに行きました。

その後、国立国際医療研究センターの国際医療協力局が企画している 4 週間の研修に参加させて頂くことができました。そこでは国際協力局が実際に行っているベトナムの救急救命センターのシステムを検討するプロジェクトに参加しました。ベトナムではまずコミュニオンという地域自治体や郡の病院を受診し、必要なら省や中央といった都会の病院へ重症患者さんを紹介し、搬送するシステムがあります。ですが、常に都会の病院への搬送が多すぎて、うまく機能していないという現状がありました。そこで、病院間がどのように連携したらより多くの患者さんを救うことができるか、どのように改善したらよいかを現地の医師や看護師と通訳を交えて一緒に検討しました。

このように、国際医療協力局が実際に行っているプロジェクトに参加させてもらうことは、とても勉強になりました。それまでは国際協力にどのように関わっていったらよいか悩んでいました。自分のできることは何なのだろう、自分のできる国際協力って・・・と考えていた時に、相手国が本当に求めているものは何なのかを考えるきっかけになりました。この研修を通じて、国際協力に必要なのは、現地の方と一緒に仕組みを考えたり、一緒に人を育てたりすることだと思いました。

この経験を通じて、今働いている現場を振り返った時に、これまで病院で行ってきた新人指導や、師長さんが行っている人事管理や病院のマネジメントが、実際の国際協力につながっていることがわかりました。そこで、ようやく自分が将来携わってい

たいのは、この延長にあると確信して、2年間大学院（国立看護大学校 研究課程部）で看護管理・マネジメントについて学ぶことにしました。大学院進学には職場から支援をいただき、2年間勉強に専念することができました。

大学院ではどのようなことを勉強されたのですか。

大学院に進学し、そこで2年間かけて中堅看護師のやりがいについて研究を行いました。研究を通してものの見方や考え方、また他の人に自分の考えを伝える方法などが身についたように思います。また、自分の足元がしっかりみえたという感じがしました。**大学院を修了されてからはどうされたのですか。**

去年、大学院を卒業してから国立国際医療研究センターに復帰し、救急部配属となりました。国立国際医療研究センターは、多くの救急患者さんを受け入れています。最初は慣れるまで大変でしたが、現場はやっぱり楽しいですね。現場で起こっていることの一つ一つに真剣に向き合って経験を積んでいくことが、将来のステップにつながると実感しています。（注：現在は、厚生労働省 東北厚生局に勤務）



▲ベトナムにて、現地の医療者とディスカッション。

将来のことについてはいかがですか。

将来は、看護管理の専門性を身につけて、現地で国際協力の専門家として携わりたいと思っています。そのために、まずは自分自身の看護師としての実践能力を磨くことが大切だと考えています。技術だけでなく、患者さんを取りまく周囲の方との調整能力とか、そういったものを含めた総合的な力を高め、また管理者として色々な経験も積んでみたいと思っています。そうした経験が、国際協力の現場での強みになっていくと思っています。

本日は、ありがとうございました。

これからも、大いにご活躍ください。

どうもありがとうございました。

